
サクラノハナ

藤森みりあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サクラノハナ

【Nコード】

N1722X

【作者名】

藤森みりあ

【あらすじ】

美桜と梨音は血は繋がっていないが、仲のいい姉妹である。

二人は、親に迷惑をかけられない、と高校生ながら同じ携帯を共同で使っていた。

また、家は遠いものいつも同じ学校に入ってくることで仲良くなった遥都と梨音は同じクラスでもあった。

16歳と15歳と15歳の脆い心は、これから振り回されていくことになる……。

美桜と梨音と遥都（前書き）

はじめまして

藤森です。

初投稿作品になります。

どんな感想でもいいので、読んでくれたら嬉しいです。

美桜と梨音と遥都

「氷点下」

いつも無表情だった私は人からそう呼ばれていた。自分のスキルをあげればそれでいい。だから他人の言うことになど構わず、また興味を持つこともなかった。

でも私には「友達」(なのだろうか)が二人いた。

「ただいまー」

靴を脱ぎながら、梨音がいう。

「おかえりなさい。遥都が梨音のこと探してたよ。何か約束でもしていたんじゃないの?」

数学の参考書に目を落としながら美桜は尋ねた。

「あっ! そうだった! あゝ... どうしよう...」

右手で頭をかき、左手で口を押さえている。これは梨音の混乱しているときの癖である。どうやら本気で思い悩んでいるらしい。

「なにか大事な都合でもできたの?」

少しいやな予感がする。声をかけるべきではなかっただろうか。

「あのっ! 今日塾でね、すごく仲良くなった子がいて。これから遊びに行かない? って...。それで、約束して来ちゃって...。」

やはり。そのようなことだろうとは見当が付く。この子は私の母の

再婚相手の子で血が繋がっているわけではない。だから目立つのだから。少し抜けているところがあるのが気になってしょうがない。

「じゃあ梨音はどうしたいの？」

「どうしたいって……。それは、遥都とはいつでも会えるから、リカちゃんのほうにいきたい…な。」

「そう。ならば、遥都に正直に話してから行くべきね。」

「うん。…分かった！」

そう言うと、いきなり制服のまま勢いよく飛び出していく。玄関まで来たとき、ふと大事なことを思いだした様で、急に立ち止まり、ふり返った。

「あ…の……。ありがとう！美桜姉」

端正な顔の頬を赤く染め、ニツコリと優しそうな笑みを浮かべると、くるりと背を向け駆けだしていった。

美桜と梨音と遥都（後書き）

どうでしたか？

次の話もできるだけ早く更新します。
感想お願いします。

携帯越しの会話（前書き）

どうも、藤森です。

今回で2話目です。頑張ります！

携帯越しの会話

ブブブブブ……

携帯のバイブが鳴っている。目をこすりながらサブ画面を見ると、そこには

「朝日奈遥都」

どうやらメールらしい。受信トレイをみると確かに、遥都からのメールが来ていた。今は午後6時。確か梨音が遊びに行ったのは4時頃だったはず。とりあえずメッセージを読むと

「梨音、莉佳って子とは楽しかったか？明日は絶対俺と遊べよ。まさか一回遊び断ったんだから、なんか奢ったりしてくれるだろ？」

くだらないメールだ。それに梨音はまだ帰ってきていない。返信はどうしようか……。

「梨音はまだ帰ってきていない。それにこの通り携帯を忘れていった。帰ってきたら連絡するようつたえておくから、それまでおとなしく待っていることだ。」

美桜

「

私たちが携帯を共同で使っていることは、周りには秘密にしている。それは、高校生にもなって携帯を姉妹で、……なんて誰が聞いても恥ずかしいから。パートの安い給料で何とか切り回している母のためにと、私が言い出したことなのだが、この生活はきついし、何より不便だ。

「はあ……。」

数学の問題を解いているうちに寝てしまったみたいだ。母も梨音も帰ってこない。……なんて、そんなことはどうでもいい。なぜだかとてもだるかった。少し休もう。そう思い、毛布を掛けて横になったときだった。

ブブブブブ……

「たあだいまあ〜！」

空気の読めない奴らだ。

「おかえりなさい。遅かったけど、どこに行っていたの。」

不機嫌な私は、仏頂面で聞きながら、携帯をいじった。遥都からのメールだ。

「そっか。教えてくれてサンキューなっ！」

なにもありがたく思われるようなことはしていない。だから、「ありがとう」を意味することばに、不覚にも顔を熱くしてしまった。

「カラオケに行っただけなんだけど、途中でナンパされて……。だから、まえに美桜姉に教えてもらった『ナンパ男撃退法』で、つま先かかとで踏んで逃げてきたから、ちよつと遠回りになっちゃったの。」

「そっ、つかまらなくてよかったね。」

そんなことも心から妹を心配して本気で言ったのだが、顔を赤くしたことがばれなくてよかったと、見当違いなことも考えた。

携帯越しの会話（後書き）

結局、また更新しちゃいました。これからもよろしくお願いします。

2人の美人と男の子(前書き)

ついに

遥都登場です！

2人の美人と男の子

今日は金曜日。最近やたらと長い一週間の終止符でもある。

「梨音、早く起きてちょうだい。電車に間に合わなくなってしまう。」

「起きない。」

彼女は私の義理の妹。くりくりした大きな目に小さな可愛らしい鼻、薄いくちびるを柔らかそうな肌持っている。髪は、ストレートで染めてはいないが茶色がかっていて肩の辺りで揃えている。姉の私が言うのもおかしい気がするが、とてつもない美少女だ。

「美桜姉は早起き過ぎるでしょ……んん……」

「朝食は用意しておいた。顔を洗って、しっかり食べて、歯を磨いたら声をかけてちょうだい。」

「ん。わかった。」

そっぴっていそいそと着替えをはじめた梨音だったが、急に大きな声を出した。

「ああっつつつつつ……!!」

「うるさい……」

「ああっ!ごめんね美桜姉。大丈夫?」

鬱陶しい……………。

「大丈夫だから。で、どうしたの？」

「あつ！そう！そうなの！あたし今日日直だったの！」

またか。

この間もあったような気がするが。

「そんなこと……。一緒の日直は誰なの？」

「一回考えるそぶりを見せてから、ハッと気づいたようにいう。」

「あつ。遥都だよ。そうそう……遥都だ。」

っ。やばい。この間のメールの件から「遥都」と聞くと、顔が火照ってしまつて、恥ずかしくなる。

「美桜姉？どうしたの？顔真つ赤だけど……。も、しかして。」

「っ。違う！私は何も考えてなんかないっつ！！」

「風邪、引いちゃった!？」

と、私と梨音は同時に叫んだ。

……梨音がアホでよかった。

不覚だ。いつも何事にも動じない私は……。

何に焦ってしまったのだろう。

私は、何に反応してしまったのだろうか……。

本当は気づいている。

……そう、今日は私も日直だった!!

「……………美桜姉？」

「何でもない。もし遅れるようなら、遥都に日直を頼めばいい。…
というか、そんなことはどうでもいい。

今日は私も日直なので、先を急ぎたいだけ。もう出たいんだけど、
梨音、終わった？」

「えっ！ちょっと待って！もう少しで終わるからっ！」

急いでかき込む音と、洗面所に慌てて走る音を背に、私は家を出た。

家を出て10分程たった。後ろからタツタツと軽快な足音がどんどん近づいてくる。

もう追いついてもいいはずなのに、すぐそこで、ずっと鳴り止まない。

そろそろだぞ。…そろそろ私も限界だ。

まだ追いつかない。

プチッ…

何かが切れる音がした。

……ような気がした。

「梨音！……うるさいっ！……そしてしっしっ……」

ふり返りながら怒鳴ると、そこにいたのは、

「よじっ……。わりっい……」

そう、やっとやっと絞り出すと、目の前の人物、朝日奈遥都は突然笑い出した。

「は……ると……？」

気づけば、駅はすぐそこ。もう遥都がいてもおかしくない場所だった。

みるみる顔が赤くなっていく。自分でも分かるくらいに。

「ははっ。あゝ！笑い疲れたわ。ちょくウケた。」

「なっ、何でそんなに笑っている！」

「だっておまえっ！顔が！いつも無表情で美人なお前が顔ゆがめて怒鳴ってたんだぜ？おまけに今、顔超真っ赤だし！」

顔から火が出そうだ。

でもそれは、遥都に笑われたからではなかった。

「美人……？私が……？私の、どんなところが……？」

「えっ」

すると、遥都にまで伝染したみたいに、彼の顔が真っ赤だった。

「や……それは違うぞ？俺の友達がなっ！その〜藤城先輩美人って！……でも、綺麗だとは思うかな。」

目は切れ長で、なんか、紅茶みたいな色してるし、鼻も、シャープだし、く……ち、びるだって……なあ！」

近くを通った、知り合いでもない通行人に、話を振る。

「！？」

「じゃあ、俺、そういうことだから！ガッコでなっ！」

遥都の姿はどんどん小さくなっている。でも、なんでだろう。

顔は、さっきよりも熱くて、心臓もドキドキしてて……

止まらないの。

2人の美人と男の子（後書き）

美桜は、意外と
天然でした。

金魚のフン(前書き)

次第に

入ってきました。

いよいよ

美桜も意識開始っ!?

金魚のフン

「美桜〜！」

み〜おちゃん？

ちよつとお！美桜！」

「！ はい。何でしょう。……じゃなくて何？えみ里」

「ちよつとホントにどうしたの？」

朝からずつとそんなんだけど。」

彼女は 冬柴えみ里。 同じクラスで、行動を共にしている。

「何でもないよ。ただ……少し、昨日の小テストの結果が気になってしまつて。スペルが違うかも知れないと今……ではなく、朝から気がかりで。」

私は、決して感情を表に出すタイプの人間ではない。故に、いつも淡々としている私がぼーっとしているなんて、周りから見ればとてももなく恐ろしい光景なのかも知れない。

そういえば、朝、担任に心配そうな目を向けられたっけ。なんか分からないけど

『保健室に行ってきた方が良かったんじゃないか？』
とまで言われたし……。

「あの……、私……。」

「なあに？」

「ひどい顔とか、してる……？」

少し、……いや。かなり珍しいからなのか、今日はなにかしら誰かに声をかけられている。もし、その原因が「私の顔」にあるならば、それは直ちに何とかしなければなるまい。

「ふうん。そんなこと気になるんだ。……じゃあやっぱり、気がかりなのは英語の小テストの結果なんかじゃ、ないんだ。」

「ちっ、ちがつっ！」

みるみる顔が赤くなるのが分かる。

……私、最近乱されっぱなし……。

そんな私とは裏腹に、えみ里は

してやったり。

そんなことがうかがえる様な、にんまりした顔をこちらに向けていた。

「なあにがあったのかな。最近の美桜ちゃんは！」

「かつ！関係ないでしょ！」

「やだ ひどぉーい！」

わざとらしい言い方で、ケラケラ笑いながらえみ里は言った。

……これだから……。

実はえみ里、学年では常に2位をキープするかなりの秀才。（もちろんトップはダントツで私だけど。）容姿も、ふわふわした可愛いことで、男子からの人気もあった。（見た目と中身の腹黒さのギャップが半端ではないが。）

私たちがつるむことで、前はとても噂になったものだ。

相手がアホならかわすことも容易いが、学年2位ともなれば話は別。しかも、えみ里はこの手の話題が大好物だ。人をからかうためだけに生まれてきました。みたいな女だ。頭がいいだけに、そんな話の理解力の高いことこの上ない。

「……スキな人でも、できたのかな？」

急に声のトーンを落とし、私に尋ねる。だがその顔は対照的に嬉しそうだ。

「な……に、急に。」

こうなると、彼女に先手を取られたのは明らかだ。丁寧に聞き返す。

「ハハハっ！ 凶星がああ！」

「何よ。……なんでそんなに嬉しそうな顔しているの。」

ムカツときた私は、愛想なく聞く。

「え〜？…だつてさあ、」

一度溜めてからえみ里は満面の笑顔でこう答える。

「いつも、あたしだけ美桜に相談したり、頼りにしたり……。だからさ！今回こんな話出てきて、あたしも一緒に美桜と悩んだり、美桜のために考えたりできるんだなあって思ったら、自然と、ニコニコしちゃったんだよね。」

「えみ里……。」

感動して、言葉もない私に、

「フフン。否定しないってことは、やっぱりスキな人できたんだ〜！〜！」

「……………！〜！」

や…やってしまった！！

「違う！あれは好きなどという感情ではない！」

「えへへ〜。やっぱりね〜。成長したね、美桜ちゃん。」

！ くっそう〜！

私のアホ！自分が一番アホではないか！

「これからは、私に相談するんだよ。」

真剣な目をしたえみ里の前では、なぜだか分からないが、素直になれ、また安心した。

「……………うん。」

「あんた絶対恋愛経験ゼロだもんね〜！」

「……………」

呆れる。私はきつと彼女にこの手の話では一生かなわないだろう。

そして今日もまた、頭のいい私たちの腹の探り合いは始まるのだ。

金魚のフン（後書き）

今回は新キャラ登場だけでしたね。

ストーリー的には、ほとんど
進みませんでした。

すみません。

美桜の絶望（前書き）

ココでの話題も

結構尽きてきました…

美桜の絶望

金曜日。それももうすぐ終わる。

それは一週間の呪縛から解かれる最高の時。

最高の時、の、はずだったんだけど……。

私は今、絶望していた。

なぜだか、その場から動くことなんて出来なかった。

目の前に広がるこの光景が、嘘であってほしいと強く望んだ。

金曜日だけ「学校に一週間通いきったご褒美」として来るこの店が。

店に下がっているこの看板が。

嘘であってほしいと。

白く、誰も寄せ付けられない堂々としているのに所々傷が付いている壁に、

中がはつきり見える仕様になっている窓。

そこにちっばけにぶら下がっている小さな看板には……

『本日より閉店』

……………ハッ！ふざけんなよ？

前置きなしに突然閉店だと？冗談も休み休み言え！

あたしがココにどれだけ金出してやったと思ってるの？

褒めてたのに。ココのはうまいって。

なのに何だ？お得意様にも黙って閉店か バツキャロウウー！！！

心の中で盛大に悪口をぶちまける。

と、思ってたのはあたしだけらしく、えみ里と他の2人の男はブハツと吹き出した。

「美桜チャンおとなしそうな顔してスツゲーえげつないこと言うねえ！」

こう言うのは、喜島とかいう男。

「ハハハッ！ホントホント！マジ顔と言葉のギャップ！」

こっちは檳村（まきむら）というらしい。

知らない男の前だけど、やはり顔が赤らんでしまう。

だって、そんな暴力的な言葉聞かれてしまったら……………。

「あれ？美桜チャン顔真っ赤だけど。もしかして恥ずかしかったりする？……………意外とピュアなんだねえ？」

初対面なのにいきなりこんなことを、しかも顔をのぞき込みながら言う。

それもあってか、凶星をさされた私はさっきよりも顔が熱くなって

いる。

「はあ？イミ分かんないんだけど。そんなに馴れ馴れしくしないでくれない？」

「おおっ！言ってくれるねえ！じゃあ、馴れ馴れしく、じゃなくて……」

そう言って私に接近してくる。

「手でも繋いじゃおっかな！」

と、手に触れる。

「っ！さっわんないで！」

その反応を見た喜島は嬉しそうに「カッ」と笑う。

「えへ！やあ〜ぱりピュアだ」

自分を崩されまくり。それもこれも全部、あの女のせいだ……！
くるりと振り向き私をこの中に巻き込んだ張本人をきつく睨む。
そいつは、あたかもそうされることが分かっていたかのように、ペ
ロツと舌を出し、目だけを逸らす。

この状況を説明するには、15分前にさかのぼらなければならぬ。

++++15分前++++

「ねえねえ今暇？学校帰りみたいだけど……」

突然声をかけられた。

「悪いですけど……」

そう言いかけた私を遮って、えみ里が

「超ひまです！私たち、誘ってくれる人、いなくて……。すうん
ごい寂しかったんですう〜！」

は、はあああ？

今日一緒にお店行こうねって誘ってきたの、そっちじゃん！
何、勝手なことってんの？

「ホント？こんなに可愛いのに？じゃあ、俺たちと遊ぼうよ。」

「はいっ！もちろんです！え〜っと、あたしがえみ里で、こっちが
美桜です！」

「俺は、喜島裕で、こっちが榎村真一！じゃあ早速だれどどこ行く
〜？」

えみ里？そのキャラ何？

それに、今日金曜日じゃん！ご褒美の日じゃん？

そんなことを考えているのが通じたらしい。

「あたしたち、いっつも寄るお店があるんですけど、そこ行きます

ん？」

「オツケ〜！タメでいいよん、えみりちゃん」

「じゃっ、いこっ！裕くんと真一くん！」

はああ〜？

私、完全に蚊帳の外じゃん。

とまあそんなこんながあつて、現在に至る、ということなんです。

++++現在++++

もうベタベタとボディータッチされまくりで、嫌悪感がピークだ。
コソコソとえみりに囁く。

「どうしてこんな誘い受けたの？」

「だって美桜、スキな人出来たっていつてたから、そういうのにちよっとは慣れないとなあつて思ったから…。」

すまなそうに私に上目遣いで言う。

それはそれでえみりの厚意だから、無下にあしらうことも出来ずに黙り込んでしまう。

「余計だったかな？」

悲しそうに笑うその姿を見ると何も言い返せない。

「うっん。ありがとね。」

精一杯の笑顔でそう言つと、そろそろ母が心配する、と抜け出して、あとはえみ里に任せて帰った。

疲れていたせいか思いの外時間がかかった。

でも、そんな疲れは吹っ飛んだ。

同時に意識してしまつた。

やはり私は、彼に惹かれているのだと。

駅。

人混みであまり前が見えない。

だけど、私はみつけてしまった。

朝日奈遥都、彼を。

この人であふれかえる場所で彼を見つけた。

それだけで嬉しかった。

声をかけるつもりはない。

見つけただけで幸せだったから。

でもそれは一瞬で崩れ去った。

隣に立って、彼の手を握る誰かに気づいたからだ。

それを見たくてつま先立ちをする。

なのに、急に見えなくなってしまった。

神様は思わせぶり……。

そう思い、あきらめかけた時だった。

人がよけ、丁度顔の全部が見えた。

見えなければ、私はまだ気力があっただろうか。

声さえも出ない。

長年見てきた顔だ。

見間違えるはずなんかひとかけらもなかった。

彼の手を握る人物が、

彼の隣で笑う人物が、

…梨音、あなただった。

美桜の絶望（後書き）

急加速です!!

揺れる(前書き)

お気に入り小説登録

ありがとうございます！

嬉しすぎて

いつでもニヤニヤしてます！

揺れる

遥都。梨音。

彼らが私の目の前で手を繋いでいる。

そういえば同じクラスなんだっけ……………。

2人とも、私の1つ年下で……………。

仲がよくて、年も同じで。

付き合う。

……………すなわち、好きになるには整いすぎている条件だろう。

最初から私の入り込む隙なんて無かった。

なのに、私は何を……………。

勝手に浮かれて……………。

馬鹿みたい……………。

ふいに目の前が塵気楼のように曇ってよく見えなくなる。
その時やっとなびいた。

私は泣いているのだ、と。

今の私にとって熱すぎる感覚が頬を伝う。
自然と声が漏れる。

声を出さないように我慢はできたけど、そうしなかった。

何故？

この悲しみを少しでも減らしたかったから？
むしろ、余計惨めになりたかったから？

たぶん、どちらも違うだろう。

ただ、寂しかった。

……………恋しかった。

他人に興味なんて示さない。

愛なんて分らない。

関心を持つなんてこと、私の中には微塵もなかった。

でも、惹かれた。

ついこの前のことなのに、ずいぶん昔のことのように思えた。

にっこり笑う、その顔に…

その瞳に、吸い込まれそうになった。

でも結局、私の独りよがりだ。

そう分かっているのに、離れない心が嫌で、だから私は

「馬鹿らしい」

その一言で、無理矢理蹴りをつけることにした。

駅でひとり涙を流す私。

今更ながら、この状況に急激に恥ずかしくなってきた。

周りを通過する人々は訝しげに私を見る。奇怪なものを見る目で。

それがたまらなく嫌で、近くの公園に逃げることにした。

小さな公園だった。

日も沈みかけているそこには、人一人いなかった。

その中に、持ち手の鎖が錆びたちっぽけなブランコがあった。

私は低すぎるそれに腰掛けた。

キィ……、キィ……。

間の抜けた音を出すブランコに笑ってしまう。

まるで、今の私みたいだ。

高く、漕ぎたい。……高く……。

そう思って、地面を勢いよく蹴り出す。
すると、やはり低すぎるからか、足を激しくひねってしまった。

「……………った……！」

声だけ漏らす。

いつもなら、こんな単純なことやらかささない。
いつもなら、こんなに感情乱さない。

そう……、いつもなら……。

きつと、今の私は酷く滑稽だろう。

そして、それと同時に、なんて情けないのだろう。

どうして、こんなに辛いのか……！

悲しくて、また涙が溢れる。

噛みしめた歯の間からは、情けない嗚咽が漏れる。

熱くて、冷たい私の涙は、頬を伝い、あごから滴り落ちる。

彼を想い、一喜一憂して、……………それだけで幸せだったのに……………。

何度も、何度も、何度も……………。

零れ落ちる涙は、頬を通過するたびに熱さを増すようで、それを紛らわせるように高く、高く、ブランコを漕ぎ続けた。

そして私は、悔しいくらい綺麗な橙の空に、高く舞った。

前に揺れて、後ろに揺れて、これでもかというほど風が強くあたる。

それが何故か妙に涙腺を刺激して、

…いつの間にか嗚咽は泣き声に変わっていた。

「……………、ふえ……………っ…！」

時折、鼻水をすすりながら泣き続ける。

次第に声は大きくなって、閑散とした小さな公園に木霊した。

もう辺りは薄暗い。

……………帰ろう。

決意を固め、公園を出た。

ゆっくり、ゆっくり、歩いて行く。

帰ったらきつと、梨音は泣きながら心配していて…。

頭の中で想像すると、可笑しくて笑えてきた。

でもそこに、さっきの駅でのことがぶり返される。

私の目は光を失い、

「もうちょっとだけ……………」

そう、自分に言い聞かせるように呟いて、くるりと身を翻した。

私は、いつまでも気持ちの整理がつかない私自身に向けて自嘲的に笑った。

その時、聞き覚えのある声を私の耳は捉えた。

「みい姉……！」

姿を見せなくても、誰だか認識できた私は、振り返りながら呼びかけた。

「は……ると……？」

目の前には、ゼエゼエと息を切らした遥都が立っていた。

「なんでいるの……？」

私の問いには答えずに、遥都は怒鳴った。

「バカ！！アホ！！」

急に、怒られて少し混乱する。

「心配かけんな……。」「

すこし赤らめた顔を向けて呟く彼に、やっぱり簡単には心は動かない……。そう思った。

「なんで頭いいくせにそんなことも分かんねんだよ……。」「

わたしの頬にそっと触れる。

真っ赤に泣き腫らした目を見て、涙の跡をなぞる。

「辛かったの…?」「

私はまさか、あなたのせいとは言えるわけがない。肯定も否定もしない私に、少し寂しそうな目を向けて

「なんで俺にいつてくんないの……。」「

そう言って、悲しそうに目を伏せた。

その姿が、幼くて、

愛しくて……

枯れてしまった涙が、また零れてしまう。

「帰ろ。」「

涙を拭って、彼を見ると、間違っくらいに大人びていて優しい瞳をしていた。

私も、肯定を意味する動作をして、歩き出す。

すると、壊れ物でも扱っみたいに優しく、指を絡めてきた。

驚き、彼を見ると、何も言わずにただ、ニッコリと私の好きな笑顔をみせた。

あったかい……。

素直にそう思った。

だけど、梨音もこの手を握ったんだなって思うと、嬉しいのに、悲しい、変な気持ちになった。

今日、好きな人と手を繋ぎました。

でもそれは、とっても辛くて、そして切なくて……。

照らしていました。

驚くほど明るい月が、儚そうに私たちを

揺れる(後書き)

長くなってしまいました。

申し訳ありません。

私の中の、赤と黒（前書き）

7話って頑張りましたよね（笑）

私の中の、赤と黒

日曜日。えみ里に呼び出された。

正直超ダルい。

何か用事があったの事なのだろうけど……。

……そうじゃなければ彼女はポッコボコだな。

待っている間、とても憂鬱で。

あの時のことを思い出した。

++++金曜日++++

「美桜姉!!」

梨音は泣きながら駆け寄ってきた。

「梨音。お前の気持ちも分かるけど……。今はみい姉だ。」

上から降ってきた声は遥都。

隣に立つ彼を見上げると、いつも優しく、深い色をまとった瞳は、信じられないほど冷酷なものだった。

知りすぎるほど知っている彼の初めて見る一面を知って、少し怖く
なった。

「行こう、みい姉」

遥都は、私の肩に手を回してゆっくり歩き出した。

「遥都……っ……」

振り返りながら梨音が必死に言葉を紡ぐ。

遥都の肩越しに見た梨音は、今にも泣き出しそうな顔をしていた。

『悲しい』とか、『悔しい』とかじゃなくて、

……『寂しい』。そんな目だった。

それを放っておきたくなくて、声を出そうとしたのに。

梨音は私の妹。

慰めてあげなきゃ……！

そう思ったのに、動き出せない。

この手を自分だけのものにしたくて。

……振り払えればいいのに。

肩に回った遥都の手を自分一人のものにしていたくて……！

結局動き出せなかった。

私、最低だ……。

黒い感情に、支配された。

嫉妬。

理性なんか吹っ飛んで、底のない闇に飲み込まれる。

初めて知ったその感情。

自分が、怖くなった。

「…みい姉…？着いたよ。」

少し思考が飛んだ私を心配して、遥都が覗き込む。

「みい姉……？」

覗き込んだときにサラリと落ちた髪の毛を、ふわっと、耳にかける。その動作があまりにも優美な動きで。

「あっ！う、うん。知っている。」

少し緊張していたのか、声の上擦ってしまった。すると遥都は、意地の悪い笑みを浮かべて、

「何？俺にドキドキでもしてんの？」

不意に囁かれたその言葉に、耳まで真っ赤になってしまつ。それに少し目を見開いた遥都が、妙に真剣な顔になって、

「…もしかして……。凶星だったりする？」

やばい。バレバレだ…。

だけど私はそんなことおくびにも出さずに鼻で笑った。

「ハッ！何を言っている。自意識過剰も甚だしい。」

未だ赤い顔を隠すようにプイと背けた。

「ふーん……。…そ。」

小さな響きが聞こえて振り向くが、表情が見えない。
遥都が向こうを向いているためだ。

「遥都？」

「ん？何？」

まだこちらを見ずに、ぶっきらぼうな言い方をする。

「こつち見なさいよ！」

少し苛ついて、大きな声を出すと、
遥都は、ニヤツと笑って

「なあに？みーおちゃん。」

と、おどけた顔を見せつける。

「なっ！」

拍子抜けした私は、間抜けな声しか出てこない。
間が開き、私が固まっていると、

「じゃ……。俺、帰るな」

急にそう言っただけで名残惜しそうに私を見つめる。
数秒経って、くるりと身を翻し、反対に向かって走っていった遥都に、私は大事なことを伝えた。

「遥都！今日は……その、……あり、がとっ……！」

大声を出したことに對しては、『ありがとう』に對してはか照れを感じてしまっただけ、どもりながらだったけど、そう伝えた。

遥都は、ビックリしたように振り返り、またわざわざこちらまで走ってきた。

「どういたしまして……！」

丁寧にお辞儀をしながら、優しくほほえんだ遥都が、私の頬を触る。切なげに息を漏らしてから、憂いのある瞳で

「俺に、……言っただけ。」

何を急に言い出す、と思ったが、さっきの公園でのことだと理解する。

そこで、ひとつ息を吐き、私の目をしっかりと見つめる。

その整った二重まぶたに吸い込まれそうになりながらも、私も遥都を見据える。

「なんでもいいから。……もっと、俺のこと……。」

一瞬躊躇って、最後の言葉を紡ぎ出す。

「俺のこと……、見てよ。」

聞き取れないような小さな声で呟いて、とてつもない速さで去っていった。

でも、今の私にとっては、その方が都合が良かった。

なぜなら、信じられないくらいに真っ赤だから。

あまり意味も理解できなかったけど、遥都が、顔を真っ赤にしていたから、ビックリしてしまった。

さっきまで遥都を想って泣いていたのに、今はあなたのおかげでこんなに幸せ。

取り返しのつかないくらい、遥都が好き……。

でも、梨音と付き合ってるのに……。

そんな風にして、私の心は黒と赤で、交互に支配される。

「ふむふむ……。」

と、私の目の前にはえみ里がいた。

「あなた、自分で考えてることダダ漏れ。」

驚きと同時に、次第に熱くなる私の顔。

「美桜の好きな人って、一つ年下で、しかも学校のアイドルの妹ち

やんの彼氏なんだ……。」

うっわ……。

私の秘密が……。一瞬にして灰となった……。

「それって確か幼馴染みの朝日奈とかって奴でしょ？あいつも人気あるからねえ……。」

う………！

暴言だけ吐きに来たんじゃないの、こいつ。
もうちょっとオブラートに包もうよ。

「美桜、あれだ！そういうときは……。」

しっかり溜めて、衝撃の言葉をはじきだす。

「略奪愛だ……！」

私の前に立つ小賢しい悪魔が、不適に微笑んでいた。

私の中の、赤と黒（後書き）

とんとん拍子で申し訳ありません……。

えみりちゃん、やりますね……。

実は、結構お気に入り。

親友の作戦（前書き）

じゃんじゃん

読んじゃってください！

ヨロシクお願いいたします……！

親友の作戦

略奪愛。

奪う……。

愛……。

りやくだつ……。

あれ？

愛って 何だっけ？

あ……。私、愛とか無縁だったんだっけ……。

奪うって。

……何を？

ああ……。愛、だっけ。

「美桜さん！完全に脱力していますね。……そんな衝撃的だった？」

「……………」

えみりは完全にフリーズしている私をまじまじと眺めてから、意を

決したように拳を握った。

「悪い、美桜!!」

そう叫ぶと、一気に拳を振り下ろした。

……………私の頭へと。

ゴンッ

そんな、鈍くも小気味の良い音が、私の大事な（ここはあくまでも重要だ。）頭から響いた。

「……………つつ……………」

ちよっぴり涙目になった私は、きつくえみ里を睨んだ。

「何をするんだ!!」

「いやだって、フリーズしてたんだもん。」

私の魂の叫びをけろりと切り返したえみ里は、自分でもってきたドリンクを飲んでいる。

一口飲み終わると、私を見下したような目をしてこう言い放った。

「まっ！美桜ちゃんそういうこと経験無いからね」

にやりと口元に笑みを浮かべるそれは、まさに悪魔の微笑である。

私の秘密を知った上に、こんなことまで言われなければならないのか。

否！！！！

故に、私はこう言い返した。

「フフン。いつまで経っても私に一点たりとも追いつけないあなたに言われたくないことだけど？大体、そんなことばかりに力を入れてどうするつもり？将来のために必要なのは学習以外の何者でもない、私はそう心得ていますが？」

案の定、えみ里の顔がみるみる歪み始める。

「あのねえ！あたしは、あんたにもそういうことが必要だと思って言ってるわけ！」

「それは何故でしょう？」

形勢逆転とはまさにこのこと。

先ほどまで微笑を浮かべていたえみ里が、私に醜態を晒している。片や私は、余裕を持って彼女を見つめている。

なのに、えみ里の口から出た言葉は、私の逃げていた心を捕まえた。

「幸せになれるから！」

その言葉を聞き、言い返せなくなってしまった。息が詰まってしまった私に構わずえみ里は続ける。

「あんたは、いつも機械的で可愛くないからそういう気持ちを、知ってほしかったの！心の底からの笑顔を見せて欲しかったの！親友なんだから……、……頭いいんだから、それくらい察しなさいよ！このバカ！！」

一気にまくし立てると、息を切らしながら私を見る。

「ちょっとくらい、私のこと信じてよ……。あんた、探り探りなの、バレすぎ。」

探り探り……。ね。

何だ、気づいてたんだ。

そこら辺のアホたちに心を許してしまえば、めんどくさいことになる。

だから誰とでも一定の距離を置いて接するようにしていた。

「……さすが、学年2位。」

フツと笑って私が呟くと、

「当たり前でしょ……。そんなになめると、痛い目見るから。」

よく分からない表情を浮かべてえみ里が言い返した。

そして何かに気づいて、あっ、と小さく叫ぶ。

そこを見ると、えみ里の持ってきたドリンクが、彼女の服にベツト

りと付着していた。

握っているカップは、見事に潰されている。

恐らく気づかないで力を込めていたのだろう。

「あー……、やっちゃった……。」

無意識に向いた目が、私と合う。

そして、どちらともなくクスリと笑いをこぼした。

「仲直り、かな？」

「そういうことになるんじゃない？」

きゅ、と手と手を握り合い、定番の『仲直り』というやつをした。

「よし！じゃあブチけんかも済んだことだし……。うちに来い、美桜
」！

切り返しの早いえみりはさておき、ひとつ疑問が浮かんだ。

「は？外でじゃないといけない話だからこんなところに呼んだんじゃないの？」

「いや？別にそういうんじゃないけど。」

きよとん、とした顔で不思議そうに私のことを見返す。

それがあまりにも出来過ぎた顔であったため、何か企んでいるのだと確信する。

でも、私は気づかないふりをして、いかにも続けそうな言葉を並び立てた。

「じゃあ、わざわざこんなところに呼び出さないで。外だとまずい
と思ってしつかりめかし込んで来ちゃったじゃない。」

確かに、間の抜けた格好では街に出られないと、オシャレをしてき
た。

「へえ。鉄人もそんなこと気にするんだ。」

「あまり馬鹿にしたような口をきくと後が怖いぞ。覚えておけ。」

私の目を見て殺気を感じ取ったようだ。

冗談は言ってこない。

その代わり、

「はい……。」

そう、青い顔で言われた。

到着。

「やー、結構久しぶりだね。美桜がうちに来るの。」

何度来ても思う。

豪華な家だと。

こんな、私みたいな一庶民が来ていいのか……。

そんなことを本気で考えさせられるほどの豪華さだ。

執事、メイドなどはいないものの、一般家庭では無いくらいの豪邸である。

「まあまあ、気楽に上がっちゃってー」

そう言っただけをぼんぼんと玄関に投げ捨てていくえみ里。とても豪邸に住む娘とは思えない。

とは言いつつも、何を論すこともなく靴を脱ぎ、上がらせてもらった。

「お邪魔します」

形だけのあいさつを済ませ、えみ里の部屋へ直行する。

ドアを開け、部屋に入ると、いいにおいが鼻をつつく。

青を主とした部屋は、サツパリとしたえみ里の性格を思わせ、たくさんのお物が同時に女の子さを演出している。

「待つといて。あたし、着替えてくるから。」

そして、そそくさと部屋を出て行ってしまった。

何もすることがない私は、戸惑って。

だから、ただ部屋を眺めることにした。

勉強道具が整った机を覗くと、そこには信じられないものがあった。えみ里と、男が映った写真で、仲良く手を繋いでピースサインをしている。

しかも、えみ里の頬がほんのり赤い。

これ……。

「ちょい、何してんの！……まったく、恥ずかしいでしょー？」

少し顔を赤らめたえみ里が眼前に立っていた。

「あの、えみ里、これ……。」

「ああもう！そっだよ！真一君ですー！どーせ美桜もナンパ野郎と付き合うなんて……って思ってたでしょ！」

その写真に写っていたのは、先日私たちに声を掛けてきた榎村という男だった。

「すご……。もう、そんなことになってたんだ。ってか……。……すご……。」

それしか出てこなくて、そればかり言っていたら、えみ里の目が、嬉しそうに輝いた。

「えへへ……。真一君ってね、あたしたちと一つしか違わなくて。出逢ったときは、すごい大人って感じたじゃん？で、もうビツクリって思ってた……。それにね、全然イメージが違うの！紳士的で、

優しいけどちょっとわるそう……みたいな！」

急に語り出したえみ里を呆気にとられてみると、ハッと気づいたように元に戻った。

「って、あたしの話は今日はどうでもいいの！今度ゆっくり聞いて！」

押され気味に言われて、心なしにうんと返事してしまった。

そしてその後、余計なことを言ってしまったと激しく後悔するのは、後の話。

「今日は！美桜のために時間を割いたの！」

ニッコリ笑うえみ里の手には、小さな何かの道具と思われる鞆が握られていた。

「美桜！！座って！！」

正直、面食らった。

何故なら、私は今えみ里にメイクをされている。

「うーんとねえ……。この服なら、ナチュラルメイクだねー。しっかし美桜ってセンスまでいいのねー。」

「何がどうなってこんなことになってるのー！」

暴れる私をおさえて、えみ里は作業を続ける。

「美桜を押さえつけてこんな事になってんのー。」

ニヤニヤと笑うえみ里に危険な香りがする。

「じゃなくて！どうして化粧なんてしなければいけないのかと聞いている！！！！」

激昂する私をいとも簡単に封じ込め、淡々とメイクをし続ける。

「後で、分かるから。」

妙に落ち着いた声で言われ、動けなくなる。

「ちょい待ってて。」

それを最後に、言葉を発しなくなった。

えみ里の目が真剣だったから、私も暴れるのをやめる。

そして、しばらく経つと、

「終わったよー」

ふう、と息をつき、疲れたようなえみ里が言った。

「よし、行っていいー！」

背中を強く叩かれ、前につんのめった私は絶句して、

「何が!!!」

と、大きな声を出してしまった。

「そろそろ午前10時!!!丁度いいタイミングです!行ってらっしゃい」

なのにえみ里はそれに臆することなく平然と言葉を続ける。

「いい?うちを出て、ゆっくり左に向かって歩いてくの。分かったら出てけ。」

はあ?

それを言い終わることなく、部屋から追い出されてしまった。もう一度ドアノブに手を掛けると、中から

ガチャリ

鍵のかかる音がした。

あの女!!!

心の中で罵詈雑言を浴びせかけ、穴が開くほどドアを睨んだ。

だが、睨んだところで何が始まるでもなく。

えみ里の言ったことを聞き入れることにした。

彼女は、人をだますなんて事はしないから、何か考えでもあったのだらう。

家を出て、左に進んで5、6歩、前方から軽快な足音が小気味よいリズムを刻んでこちらに向かってきた。

顔を上げると、ランニング中の遥都だった!!

「やばいやばい!!こんな化粧してなにしてんだろって思われる……!!」

咄嗟に近くの電柱に身を潜めたが、目ざとく遥都は気づいたようで、走るのをやめ、私のところに歩みを進めてきた。

「ねえ、みい姉でしょ……?」

「うわぁ……。来たよ……」。

「えみ里のやつめ。何から何までこれが目的か……」。

「はい、そうですけど。」

もう開き直って、振り向きながらニッコリと微笑むと、遥都が、少し怒ったような顔をした。

「…………そのカッコ、何してんの」

ぶっきらぼうに、汗を拭いながら私に問う。

「や、秘密。」

「目的が目の前にいるんですけど!？」

「へえ、俺に言えないようなことなんだ？」

な、なに……。

後ろの壁に手をついて、私を逃げられなくする。

……もう！なんで梨音がいるのにこんなことするの……。

悲しくなって、同時に嬉しくなる……。

でででもー！！

こんなの、端から見たら誘惑以外の何でもないでしょー！？

「そんなこと、いくらでもあると思うけど？」

心中のドキドキを悟られないように、強気な態度で臨む。

近づいてくる遥都から視線をずらすと、えみ里が窓から覗いていた。

目が合うと、えみ里は自分の頭を指し、音は出さずに口を動かした。

どうやらこう言いたいらしい。

『前から気づいてたから。機転を利かせたの。朝日奈、近所だったんで。』

そして、まるで小学生のようにほくそ笑んだ。

ピースサイン付きで。

私が怒り狂っていると、遥都から声が飛んできた。

「ねえ、ちゃんと俺のこと見てんの？」

見るからに苛ついている遥都は、やはり子どもって感じで、愛らしかった。

だけど行動は全然子どもなんかじゃなくて！

ズン、と遥都の顔が迫ってくる。

顔が熱い。

もう、とろけそう……。

……！

だめだめ！

えみ里が見てるよ……。

だけど、遥都は、私の目の前にいて、私のことしか見てない。

こんなチャンス無いのに……。

どうしよう……！

どうしたいの、私！

親友の作戦（後書き）

変なところで切って
すいません……。

次、できるだけ早く
更新するので許してください……。

魔法の言葉（前書き）

こんにちは

前回中途半端で終わった話の続きです

8話が 上 だとすると、

今回の9話が 下 ですね（笑）

魔法の言葉

ほのかにシャンプーのおいがする……。
それに混じって、清潔な汗のおいも……。
土？それとも草だろうか…。

分かった。これはまるで若草のような汗のおい。

息が上がリ、火照っている彼はもうすぐで鼻先がついてしまうほど近くにいて、私の心臓の音まで伝わってしまいそうなくらい。

彼の熱が伝染して私まで逆上せてしまいそう。

だけど、逆上せて気絶なんてしちゃってはいけない。

私だけを見つめている今の彼を、離したくないから。
でも、だからといって何をすることもできない。

整った目鼻立ちをした少年に逃げ場を失われて、その上熱っぽい視線を送られていればどうすることもできないでしょう。
はたまた、甘い言葉を浴びせられたら立っていることもやっとなのに……。

そんなとんでもなくチャンスはこの状況を、私は何とか乗り切らなければいけない。

何故だつて？

それは……、

私の親友であり、あげあしをとりたいたっぱっかりの女に、この状況を盗み見されているからである！

いや、そもそも私が今、目の前にいるこの人に好意を持っていることはあの女には知られている。

だったら、このまま流されてしまつのもいいんじゃないかなあ……。

待て！早まるな美桜！！

あなたのプライドはそんなもんだつたんですか？

もう、どうにもこうにも学年トップのこの私の頭を限界まで駆使しても答えが見つからない訳で……。

そんな理性をかき集めて脳内でもがきまくっている私に、拗ねた声が降ってきた。

「ねえ、みい姉。今日の前にいるのは俺じゃん？何違うこと考えてんの？」

ああ……。どうせならもつと声を荒げてくれた方がいいのに……。そしたら私だつて、何かと誤魔化せたのに……。

「話している人の目を見て話せて言ったの、みい姉じゃん。それが礼儀なんでしょ？こつち見て。」

未だに返事をしない私に苛ついていたのか少し早口になっている。

そして、なぜだか遥都の右手が私の顔へと伸びてきて……。

「ほら、ちゃんと見て」

あごに触れ、あるう事が自分の顔のほうを向かせる。

すごくビククリして、なのに心臓が破裂しそうなくらい働いている。耳まで真っ赤になってしまった。

触れられた場所がジンジンと熱を増していく。

「は、遥都……!」

手を払いのけようとするのに、体に力が入らない。

「ん?何……?」

私の幻想なのだろうか…。

遥都の声も、妙に甘くて、顔も紅潮しているように見える。

すると、

「うわあ!」

不意に遥都の熱い手が首元にまわってきて、思わず声をあげてしまった。

すると、遥都もハツとしたように顔を上げ、ものすごいスピードで私から遠ざかった。

「わ、わりい……。」「

口元を掌で覆い、長い睫毛を伏せて呟く。

「そんな！めめ、滅相もない！」

本来なら、こんな言葉を使わないのだが、どうやら相当パニックだったらしい。

1つ年下の遥都に敬語を使ってしまった。

「……………」

かなり気まずくて、長い沈黙が訪れた。

だけど、動くこともできないような重苦しさを、『じゃあね』の一言も言い出せない。

どうしよう、どうしよう……！

この場から離れるのは、いつも常に氷点下の私には難しい事ではない。

でも、相手は遥都だ。

この状態で嫌われたくない。

少しずつ、近づけていたのに……。

すると、誰かが全く空気の読めない声で話しかけてきた。

「あつれれえ〜？美桜と朝日奈じゃん！超奇遇ですね〜、みたいな

」

え

え

え

えみ里くくく！！？

「今日、朝日奈遅くね？いつつもこの時間にはココ通り過ぎてんじやん」

「ん。まあそーですけど。」

「なんか用事でもあったの〜？」

「そんな道の真ん中であるわけ無いじゃないですか」

ケラケラと笑い始める遥都。

「つてゆーか何でさっきの雰囲気から、こんな速攻で切り替えられんだ。」

「だよね〜。んじゃ何でこんなところで止まってるわけ？」

「パツと見たえみ里の顔は、悪戯をけしかけた子どものようにほくそ笑んでいた。」

「いや、あんたまるまる上から見てたでしょうがぁ！！！！」

「しかも『全然ココで何あったかなんて知りませんけど？』っていう傍観者面が余計腹立つわぁ！！」

「……………い……………や。別に何もなくてすけど」

遥都は、ウツと息を詰まらせて、強張った顔だったが言い遂げた。

「ふーん？ま、別にいいけど？」

よ、良かったあ……。

ホツとしたのも束の間で、今度は私に語りかけてきた。

「で？なんで美桜はそんなオシヤレしてるわけ？」

……………は？

「てゆうか、初めてこういう美桜みたわ。さすが容姿端麗の代表
って感じ？」

だ・れ・が！

誰がこの格好をけしかけたんですか！！！！

「……………そうだよ、さっき俺も聞いたじゃん」

しかも、遥都まで乗ってくるような質問しやがって！

こいつ、絶対この状況楽しんでるよ。

だって口角若干上がったてるもの！

隠しきれないもの！

「だ、だから、そんなの関係ないでしょ」

取り敢えずかわしきろう。

そんなことをえみ里の前で考えた私が馬鹿だった。

「でも、美桜って好きな人いるじゃん？もしかして今日がデートの日だったりするの？」

ななななな何を言っているの!？

本人の前で暴露してるんじゃないよ!!

当の本人は口をあんぐり開けてパクパクしている。

「み、みい姉……。」

そこまで言っつて、口を閉じ、目を逸らした。

その横顔は、少し怒気を放っていて、近寄りがたい雰囲気を漂わせていた。

「俺、ランニングあるから。じゃあまた、冬柴先輩」

目も合わせずにそそくさとその場から立ち去ってしまった。

私の事なんて、触れもしなかった。

私に向けての言葉は、無かった。

「あゝあ……。いつちやったねえ……。」

もう……。

最悪……。

「えっ！？ちよつ美桜！！？」

もう、えみりなんかいなくなればいいのに。

私も、その場からすたすたと歩き出した。

えみりが追いかけてくる音がする。

でも構わずに速度を上げて歩き続けた。

「もうっ……！美桜ってば……！」

私の腕を掴もうとする。

それを振り払って、精一杯の罵声を浴びせかけた。

「やめてよ！！えみりにとっては楽しいことでも、私は本気でやっていたことなの！！なのに、あんな悪ふざけで……。信じられない！
！ホント……、もう、やだあ……！！！」

途中から泣き声に変わった私の声を聞きながら、えみりもぼそりと言葉を紡ぐ。

「……ごめんなさい……。でも、あたしも、美桜のことと思ってやったの。」

悲しそうに顔を伏せるえみり。

「なにが！どこが私のためなの！？」

流れる雫を気にも留めず泣き叫ぶ。

「……自分で気づいて欲しかったから、……黙ってるつもりだったんだけど……。」

一瞬躊躇してから、もう一度口を開く。

「朝日奈の気持ちをも、確かめるため……、だよ」

えみ里が何を言っているのか、あまり理解できなかった。それを察してか、言葉が続ける。

「だから、それを見て、美桜のことどう思ってるか見ようとしたの！」

私の口からは言葉が出ない。

「ゴメンね、美桜。でも大丈夫。もう美桜のこと泣かせたりしないよ……。」

えみ里はぎゅっと私を抱きしめて囁いた。そのぬくもりに、自然と涙が溢れる。

「ひい……っ……、ん……、うあ………ん、っ」

そのまま、しばらく動かないでくれた。

そして、おもむろに口を開き、私に言い聞かせた。

「脈アリ、だよ」

何のことが分からずに、首をかしげてえみ里に問う。

「え……？」

すると、今度はフツと笑って言った。

「朝日奈は、美桜のこと、好きなんじゃないかな」

梨音の存在。

遥都の気持ち。

そんなの、どうなってもいいような……。

魔法の言葉でした。

魔法の言葉（後書き）

ついに動き出した心と心……！

言っておきますと、
まだまだ続きます。

秘密の始まり（前書き）

こんばんわ^^

ついに二桁突入です
夢のフタケタだぁ〜い

秘密の始まり

『朝日奈は、美桜のこと好きなんじゃないかな』

あれから二日。

私の頭の中は、今でも、紅潮した遥都の頬とえみ里が言った一言で渦を巻いていた。

「美桜姉ー。今日、起きるの遅いねえ？」

制服に腕を通しながら、歯磨きと同時に進行する梨音が、私に声を掛けた。

「そうかな……。あ、ごめんなさい。私が早く起きないと朝食が事件なんだよね……。あなたが作ったんじゃ、美味しくないものが出来るんだっけ……。」

未だ上の空だった私は、つい本音を交えて返してしまった。

「み、美桜姉？そんな風に思ってたの？……ごめんね……。」

がつくりと肩を落とし、潤んだ目で必死に鍋と睨み合う梨音を見たのは、それから5分後。

当然何故そんな状況なのか皆目見当もつかない私は一応梨音に問うてみた。

「どうしたの、梨音？朝ならいつも私が作ってるじゃない。」

すると、涙が膜を張った大きな瞳がユラユラと揺れて、

「だって美桜姉があ〜」

とうとう泣き出してしまった。

「ごめんなさい、私、ちょっと最近変で……。あまり話しかけない方がいいかも……。」

目を合わせづらい空気の中、恐らく人生で初めて梨音に謝った。

「話しかけるなって……！だめだよ、美桜姉。最近すごくキラキラしてたのに……。」

思いもよらない梨音の食いつきとその言葉に、動揺するのが分かった。

そして同時に、梨音の瞳に、寂しげな陰りが見えた。

でも、それは本当に一瞬の出来事だ。

次の時にはもう、いつもの梨音が顔を見せていた。

「よっし！行こう、美桜姉。今日は早起きしたから一緒に出れるね」
目を細めて優しく微笑むそれは、姉ながらも見惚れるような極上のものだった。

「そういえば、何で今日は早起きだったの？」

並んで歩行している梨音に、いつもならばあり得ない行動を起こした理由を聞いてみた。

すると、ほんのり赤く染まった頬で嬉しそうにはにかんだ。

「えっとね、今日は、遥都と一緒に学校行こうねって約束したの！」

瞬間、咄嗟に言葉を探したが、何も見つからなかった。

可愛い横顔を見つめて、その口を見た。

そんなことをしたところで、今彼女が話したという事実は消えることとはなく、私に残酷な傷を残した。

「な、……なんで遥都と一緒に……？」

聞いたところで余計傷が深くなるだけ……。

そう、自分に言い聞かせてもどうしても止まらなかった。

「んー？この間ね、あたし……」

心なしか梨音から発せられる言葉は一言一言スローモーションに見えた。

「梨音！！わりいー！俺、今日寝坊し、ちゃっ……………て…。」

不意に、大きな声が後ろから飛んできた。

振り返ったと同時に目が合った遥都は、私に驚きながらも言葉を連ねた。

「遥都遅いから美桜姉と来たの。えへへ、罰ゲームー。あたしと美桜姉の荷物持ってってー」

梨音が笑顔で遥都に荷物を押し付ける。

えみりに言われたことも、遥都の真剣な瞳も、梨音の前じゃ何にもならない。

ましてや、この喧嘩別れみたいになつたのに、一緒に居ても気まぐずだけだ。

それに、この二人の仲が分からないほど子どもでもない。

「私がいい。二人で行って。」

すこし、嫌な顔をしていたかもしれない。

隠すように前を向き、早歩きでその場から離れようとした。

「みい姉……………！」

名前を呼ばれて……………。

ではなく、

遥都の声に反応して振り返った。

ふわり、と風がなびいた。

「あの、俺……。この間どうかしてて……。ゴメン……！」

真っ青な空に眩しすぎるほど映える白のシャツが、輝いていた。その言葉に驚いて、半ば勢いで叫び返した。

「私も、なんか……。ごめんなさい。」

遥都しか見えなくて。

火照ってしまった頬を、風に流された髪の毛が隠してくれた。

安心したような表情を見せて笑う。

「許すよ！……そっちは……？」

最後の言葉だけ、張り詰めていて少し、震えていた。

「もうとっくに許してる！」

今度こそ本当に満面の笑みを浮かべてくれた。

それ以上は何も言わずに、学校へと歩みを進めた。

+++++

学校帰り、

「今日は、時間進むのが早かった。」

ぼつり、漏らしたその言葉に、えみ里がガバツと跳ね上がる。

「ホント!?!」

あまりに希望に満ちた目を向けるから、引きながらも尋ねてみた。

「それがどうかしたの……?」

不審を抱きながらも、何事も無いように振る舞った。

「あのね、恋をしてると、時間が早く感じるんだよー?」

楽しそうにはしゃぐえみ里。

いつもの悪意に満ちたあの笑顔じゃないから、真面目な話だと察する。

「その人の事ばかり考えちゃって……。好きな人のこと考えると楽しいでしょ? だからね、はやく感じるの!」

確かに、そうなのかもしれない。

それだけを聞くと、もう何も耳には入って来なかった。

気がつくとな家の前で、隣にえみ里は居なかった。

「ただいま」

いつも一番最初に帰る私。
だけど、この日は先に梨音が居た。

「おかえりー、美桜姉。あたしこれから出掛けてくるねー」

うっすら化粧をした梨音は、上着を着て外へ出る直前だった。

『どこへいくの?』

そう言いかけたが、聞くだけ無駄か……。

と思い直した。

どうせ遥都のところだ。

ところが、梨音の口から出てきた言葉は、予想とは反するものだった。

「今日友達と遊んでくるねー。あ！あとね、大事な事なんだけど……」

しっかりと私の目を見据えて語り出した。

「遥都からメール来ると思うんだ。だから、来たらあたしの振りし
て返信して？」

自分の顔の前で手を合わせて頼むポーズをとる梨音。

「え？お断り。そういうのは自分でやって。ていつか携帯持って行
けばいいじゃない。」

素っ気ない態度をとったつもりだったが、内心遥都とメールできる
なんて……。
表情とは裏腹に、胸の内は踊っていた。

「美桜姉ー、お願い！文面は美桜姉でいいから。」

必死に食い下がり、退かない。

「そんなの、ダメじゃん」

でも、私は妹の彼氏に手を出せるほど器用ではない。

「大丈夫、今遥都とは『美桜姉普及強化月間』実施中だから！じゃ、
間に合わないから行ってくるね！お願いしマース」

強引に押し付けられた携帯を、私は、両手で握っていた。

ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど。

遥都とメール……！！

秘密の始まり（後書き）

わーい！

書き終わったあー！

感情の交差（前書き）

しばらく開けてしまって

申し訳ありませんでしたm（| |）m

ペース戻したいと思います。

感情の交差

ち……ちよつと待ってよ……？

うわ、私 顔超熱い…！

今は何もしてないじゃん。

何でこんな心臓バクバクうるさいの…。

梨音が出て行ってから20分たった今も、私は携帯を両手に持ち動
けずにいた。

いや、でも……、

メールなんて来るのか分かんないし、わた、私だつてこんなに構え
てる必要ないんじゃない…。

ていうか！

大丈夫だ！

たかだかメールで緊張するなんて、そんな人いない。

普通にポケットに入れて、勉強して。

受信したときだけ内容を見て、返信すればいいだけ。

そもそも私、前に一回遥都にメールしたことあったじゃない。

梨音も、私の文面で送っていいって言うってたし……、

前回と同じように素で送ればいいんだ。

紅潮する頬を鎮ませ、また火照り……、その度遥都に向けての想
いが強くなる。

特に何をしたわけでもないのに活発に動く心臓を抑えるため、深呼吸をしたその時、

ブブブブブ……………。

携帯が私の手の中で震えた。

それは、私だけが知ることの出来る音……………。

そう考えると、小さな携帯の震えもけたたましく鳴り響いているように思えた。

そっと携帯を開けると、

『新着メール一件 朝日奈遥都』

早く見たい衝動に掻き立てられながらも、ゆっくりと受信メールを開く。

『今 何してるー？』

たったそれだけ。

遥都は、このメールを送った相手が梨音だと思っている。

だから、この内容に余計ショックを受けた。

彼らは付き合っていて、だからこそ用もないのに他愛もないことで会話出来る。

それがどうしようもなく羨ましくて、それと同時に、付き合っている人がいる相手を好いてしまった私が憎たらしくて……………、泣いてしまいそうになった。

『家にいる。特には何もしていない。』

素っ気なかったかもしれないが、返信した。

メールで、相手の顔が見えなくても、何故だか心境がばれてしまい
そんな気がして。

少し落胆した私は、参考書を取り出して、勉強を始めようとした。
途端、

またメールを受信した。

『それ、みい姉みたい（笑）……ってそうだ！ みい姉普及強化月
間なんだっけ（＾o＾）ウケるなw ……いっけね！ ……笑える
話だ。』

私の話題だ……。

遥都が今、どんな顔をしているか気になる。

私のことを話題にして、どんな表情をしているのか、すごく気にな
る……！

それもすごく気になるんだけど……、

『美桜姉普及強化月間』って何だー！

そういえば、さっき梨音が言っていた。

一応スルーしてたけど、スルーしてたら分かんないじゃん。

遥都に聞いてみる……？

いや、ダメだ。

遥都とメールとはいえ、あくまでも梨音の振りという名目での事な

んだから。

さり気なく……、質問とは思えないような感じでいけば……、

『何故、普及月間を開始したのだったっけ？』

……。

これ……、さり気ないかな……？

まあ、これならギリギリ返してくれるだろう。

送信をして、傍に携帯を置く。

そして、もう一度参考書に目を落とす。

しばらく返信が来なかった。

どうしよう……。

私だってばれたかな…？

そりゃ、遥都からすれば不自然な問い……、愚問だ。

もう少し慎重に考えれば良かった。

自分の愚かさに後悔していると、それを待っていたかのように携帯が震え始めた。

恐る恐る受信されたメールを見ると……、

『お前って底意地わりーのな。あんな恥ずいこと、何回も言えるわけねーじゃん。あれが、最初で最後の告白ですよー（・ー・）（・ー・）』

答えは、書かれていなかった。

その代わり、二人の間に割り込んだ私には分かるはずもない返事が返された。

遥都とメールするってことは、梨音の存在を強く認識させられること。

それってやっぱり、辛い……。

『ごめんなさい。そんなつもりじゃなかったんだけど……』

適当に話を合わせた。

なんだか、さっきまでドキドキしていた自分がアホらしくなってきた。とっっても疲れていた。

「はあ……、」

少し……というか、かなり楽しみにしていたのに。物憂げになっただけではないのかな……。

すると、携帯が光っていて、いつのまにかメールを受信していた事に気づいた。

『あやまるなって。俺があやまんなきやいけない立場なのに。むしろ、感謝してるよ（＾―＾；）気遣いしてもらって。ていうか、このゲームも最悪なタイミングだよー。俺が言うのもアレだけど……。

この強化月間だったせ、みい姉が人間っぽくなってきて、よく笑うし……。

結果的に得してるのはいつも俺で……、こんなこと照れて、目の前でなんて言えねーけど。

今度、何か奢ってやるよ。じゃあ、また明日な（＾―＾）v』

思ったよりロングメールで、戸惑った。

内容が皆目見当つかない、ということもあつたのだが。

私が人間っぽいなんて、当たり前じゃない。

人間なんだから……。

気づかずに笑みがこぼれてしまう。

何でだろうね。

「……ふっ……どうして……」

どうして、梨音なの？

どうして、私の妹なの？

そついで尋ねながらも同時に思ってしまう。

梨音だから、諦めなくちゃいけないって分かるんじゃないの……？

そんな理屈を並べても、どうこうなるわけじゃないんだ。

“好き”って感情は、口で言っただってどうにもならない。

心が勝手に、そう認識しちゃうから。

だから、怖くなってしまう。

……、それより先を、望んでしまう自分が。

ただ、話して、笑って……。
そんなんじゃないの。

もっと欲が出てしまった。

きっと私 今、思い通りにならなくて、すごく嫌な顔してる。

そんな私を、知らないで欲しい。

そして、やっと気づいた。

零れたのは、笑みだけじゃなかったと言っことに。

温い。

頬を伝うのは、どうしようもなく情けない涙だった。

笑顔にして。

不安にさせて。

泣かせて。

また笑顔にして。

……そして、また泣かせて……。

どこまで私を掻き乱すの………？

……。

楽しいはずだったメールなのにね。

かぶった毛布のすそが涙で濡れて冷たくなっていた。

感情の交差（後書き）

ふう。

なんだか短いでしょうか？

焦り焦りですいませんm) | | (m

夢と現と幻（前書き）

こんばんわー

最近忙しいので更新
遅くなってしまうかもしれませんがm
（
（
m

夢と現と幻

行かないでよ……！

私、そんなに遠くへ行けないの！

どうして？

俺のそこ、来たくないだけじゃないの？

ち、がうよ………！

行かないんじゃないよ、………行けないの………！
でも、………遥都の傍に居たい！

じゃあ

俺が遠くに行っても追いかけてくれる？

無理、だよ………。

どうしてなの？

だって、遥都は………、

最後に、微かに遥都の声が耳に響いた。

「みーお姉！ ご飯だよー！ 机片付けてー」

意識の端で、梨音の声が聞こえたような気がした。

「美桜姉！ 起きなさい！！」

被っていた毛布が無理矢理はぎ取られた。

寒い。

顔を上に向けずに呻き声を漏らす。

「……………。う……………、ううん……………」

「もう！ どうしたのー？ いつつも超目覚めいくせに、昼寝なんてしてー。余計目がさえちゃうじゃん。……………美桜姉？ まだ寝ぼけてんの？ はあぁー。顔洗ってきて！ すぐに！ ゴー！ ナウ！」

私に説教するのが嬉しいのだろうか。

笑みが漏れそうな顔を必死に堪えている。隠しきれないが。

「今 洗ってくるから」

のそのそと立ち上がり洗面所へ向かう。

電気をつけ、鏡を見るとうつすらと涙の跡が見て取れた。

梨音に見られなかっただろうか。

恐らく大丈夫……、見られてたら騒がれるし……。

ごんまりとした洗面所の何ともちっぽけな蛇口をひねり、冷たくなってきた水をすくう。

刺すような冷たさは、私の体温を奪うだけなのにやけに気持ちよかった。

パシャリ……。

三回ほど顔に浴びせかけ、頭を醒ます。

タオルで顔を拭い、今一度鏡を見れば殆ど無意識のうちに溜め息が漏れた。

ここ最近、私 泣いてばかりじゃない。

想ってるだけ、なんて。

ただの綺麗事なのに。

するとまた、情けない程小さな溜め息が口の端からこぼれた。

「あつ！ 美桜姉！ 目え覚めた？」

キッチンで作業に勤しむ梨音の声からは、どこか楽しさが滲み出ていた。

「うん……。ありがとう」

実はまだ臆気だったのだが、梨音の手元を見てギョツとする。

「り、梨音！？ 何しているの？」

「あ、これ？ なんか、失敗しちゃったみたい」

「もう、下がっていいよ！ ご飯は私が作るから！」

正直、面食らっていた。

まさか私の妹がこんなに不器用だったとは……。

梨音も梨音で、自分の玩具を取り上げられた子どものように拗ねている。

その手元の物質は、原型が分からないほどに崩れていた。

「何を作ろうとしていたの……」

「ごめんなさい」

もう完全にいじけている梨音は、俯き、言葉を発することも億劫になっっているようだった。

さすがにそんな姿を見れば、きつく接することもできなくなる。

「言い過ぎた……、ゴメン」

心の隅で思ってしまう。

私は甘いのかもしれない、と。

勿論それは、こういう日常的に起こることも含めてのことだが、

えみ里から、

『あなた、嫉妬とかっていう感情ないの？ もっときつくしてもいいんじゃないの？』

と、梨音について意見されたところであった。

分かってはいる。

だけど、梨音にこの気持ちを向けたら遥都に罪悪感を感じてしまっ
て……。

それに、……この気持ちが。

梨音を見るたびに膨らむこの黒い気持ちが……、
一旦解き放てば、もう抑える事なんて出来ないような気がして……。

だから、しっかりと向き合おうとせずに閉じこもる私は、

……きつと誰よりも卑怯で、……汚い。

思考がそこまで達したところで、携帯が震えだした。

『新着メール一件 朝日奈遥都』

うわあ、遥都だ。

この間、メールで喧嘩別れみたいになって……って、
私、梨音だと思われてるんだっけ。

少しでもそう考えてしまった私に自分で嘲笑する。

すると、

「あつ！ 美桜姉、メール来たっ！ あたし、ちょっとトイレ行きたいから返信しといて！」

梨音が行ってしまった。

「携帯、持って行けばいいのに……。」

独りつぶやき、表情では嫌そうに取り繕っても内心、心の躍っている自分が嫌でたまらなかった。

『梨音、やっぱり俺決めた。 来週辺りにちゃんと決行する。』

遥都から届いたメールは、やはり私には分からない事についてだった。

『しっかり、』

内容が分からない私には、曖昧にして返すしか術がなかった。結果、中途半端で送ってしまったが。

混乱していた私は、梨音が戻るまで待てば良かったという事実気づかなかった。

しばらく経つと、また返ってきた。

梨音との絆の深さは分かったから……。

だから、もうこれ以上傷を深くえぐらないで……！

『夢、見たの。それ、すっごく胸騒ぎして……、だから。』

意味なんて、全く分からなかった。
だけど、目は不思議とそこへ向いてしまった。

……………夢、見たの。

……………ユメ、ミタノ。

そう、なんだ……………。

私と一緒にだね。

私もさつき、遥都の出る夢を見たの。

それと、妙な胸騒ぎ……………ってところも同じ。

夢でも会えたって喜んでたら、どこかに行っちゃうんだもん……………。

『私も。胸騒ぎする夢を見た。』

送信画面で、送信されたことを確認してから携帯をその場に置いた。

++++遥都++++

梨音に、報告をしないと。

そんな気持ちで、メールした。

『私も。胸騒ぎする夢を見た。』

何かが、突っかかっていた。

この前と今日……。

まるで梨音じゃ無いみたいなメールで…、みい姉、みたい、な……。

今日の梨音との会話を思い出す。

『遥都は、このままでいいの?』

『はあ? いきなり何?』

『だーかーらー! あの作戦だってば!』

『ちょ、お前デケえ声でそんなこと言っなよ!』

『……。……だって、あたし……』

待って、

“あたし”……?

過去の受信履歴をいくつも確認する。

メールでも、口調が変わるわけではなかった。

もらったメールの全ての一人称が“あたし”だった。

……と、いうことは……、

相手は……、みい姉、なのか……?

そう意識した途端、心臓が喉から出てくるのではないかと言っほど飛び跳ねた。

そしたら、俺……。

++++美桜++++

行かないでよ……！

俺のこと、追いかけてきてよ。

出来ないの……！

夢の続きを思い出そうとしていた。

どうだったんだっけ……？

とっても、大事だったと思うのに……。

思考を巡らせていると、携帯が、机の上で携帯が振動した。

『俺が見た夢、みい姉なんだ』

遥都からのものだった。

何を伝えたくて送ったのか、分からなかった。

自分が今、どんな顔をしてるのか、分からなかった。

だけど、不思議なことにこのメールを見て、夢の続きが鮮明に脳裏に蘇った。

++++

俺が遠くに行っても追いかけてくれる？

無理、だよ……。

どうしてなの？

だって、遥都は隣にもう、いるじゃない……。

俺に？

いないよ、そんなの。

俺は、……俺には！

……みい姉が居れば、……それでい

いんだ。

遠く、遠く。

耳に残って尚も離れない、甘くて一番、残酷な言葉が、蘇ってしまった。

夢と現と幻（後書き）

走り出した運命……！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1722x/>

サクラノハナ

2011年11月2日22時08分発行